

慈眼寺たより

第 12 号

平成 24 年 7 月

春日井市下市場町

「慈眼寺」

電話 81 - 6801

編集 伊藤秀文

碑（いしぶみ）

北町内 伊藤正

「高き碑 後の世に 功つたえて仰ぐなん」。思い起こせば小学四年生のときのこと。私の郷里、朝宮の兵士が満州で戦死され、鳥居松小学校の近くの村道脇に立てられた自然石の忠魂碑を仰ぎつつ、村民こぞって鎮魂歌を歌った式典に参列したのを鮮明に覚えている。あれから八十年経ち、九十歳になる私の周りに様々な碑が立てられてきました。思いつくままに、気の付いたことを述べてみたいと思います。

当地、下市場に関するものはまず「下市場ほ場整備」完成の記念碑であります。北城の精米工場の傍らに立つており、題字は丹羽兵助衆議院議員によるものであります。

次に、当地の大事業であった区画整理に関するものです。これは下市場公園北隅に、当時の市長であった鵜飼一郎氏の「憩」という碑と一緒に建てられています。旧

来の区域を根本から改訂した大事業は、この碑に刻まれて永く伝えられると感銘を覚えます。これは当地区に居住するすべての人々に長期にわたって関わりを持つ大変な難事業でありました。

区画整理といえば、丁度この時期、私は名古屋市中から長久手市へ出向しておりまして、そこで今は亡き桜井尚さんと、よくお会いしたのを思い出します。氏は当時、トヨタを退職されて非常勤の役員などをしておられ、午前中の会議の後、帰り道によく私のところへ寄られたものです。新庁舎になったばかりの長久手では、受付で色々と用件などを聞かれるのが鬱陶しいと大きな声で言われていました。応接のテーブルで、区画整理の準備中のいろいろな話をしては、勉強になったで、また来るわ。というような調子でした。施行令や要項などの本を書架から取り出しては、いろいろな質問しつつも、今ごろワシがこんな本を読んでも仕方がないよな。」「そくだよ。細

かいことは玉野がやってくれるし、市役所も全面的に指導してくれるから心配ないよ。」などと言いつつたものです。気楽にしなければ体に悪いよと言ったものですが、理事長を務めるとなれば、いろいろな心配や気苦労も多かっただろうと思われまふ。この文を書きながらも氏の顔が浮かんできます。

区画整理の完成の後、墓地の建設や慈眼寺の整備事業が有りました。これらの輝かしき事業の進展にともない、各所にそれぞれの「碑」が建立されました。境内及び墓地に建てられた「碑」を列記しますと、まず、戦没者のお墓にはそれぞれの勲功が書き込まれています。その奥には伊藤為治氏の記念碑があります。

本堂西奥には伊藤太吉翁の顕彰碑、その手前には整備事業の記念碑が並んでいます。整備事業の経緯・経過などを後世に伝えるべく建てられました。

またお墓には、墓地整備の由来のほか、伊藤磯右工門翁の顕彰碑も立っています。

これらの碑にはそれぞれの事業に関わった人々の努力の後が記されているはずで、機会がありましたら、往時の人々の苦勞を偲びつつ、ご覧になってください。

（前 檀方総代）

《青柳歌壇・俳壇》

。青柳山蝉の声からの一日

。東北の菩薩の目なり桜咲く

伊藤清雄

。週ごとに花と果物取り替えて

妻の霊前しばしの瞑座

。狭き畑耕し施肥し畝づくり

うまく育つか六種の野菜

今井正

。里帰りせし子喜ぶ蕪漬け

。雨降って牡丹の一つ崩れけり

貴美子

。朝蟬の軒に鳴き出す広島忌

。観音の木目涼しき朝の講

孝子

。あじさいを見ながらコーヒー一杯

今日は楽しい二人

。待ち遠し週四回のデータービス

洋服着替え又着直す

伊藤一重 九四歳

。子供の日子ら集まりて芍薬開く

。生きていて見る日食とスカイツリ

ひさ 九二歳

。明日またと言いつつ病室出るとき

にベッドの夫は眉間に皺寄す

。ばらの刺さけつつ登る雨蛙天気予

報は明日雨と告ぐ

あ

。新盆の悲しき夜の星の数

桜井千津

受けた恩は忘れない

下市場町 伊藤裕規

私は人生六十六年の大半をこの地で皆さんのお世話になりながら暮らしています。父領一は、この地で生まれ、六歳で養子に出されますが、義母の死亡で一旦下市場に戻り、尋常小学校卒業後、名古屋に出て呉服屋に奉公しながら独学で簿記を学び番頭になり、詩吟や書も習います。徴兵検査は病弱で不合格、豊川の陸軍工廠に徴用されます。そこで農家の娘きくゑと結婚、長女である私が誕生。豊川に永住の予定だったようですが、跡取りであった叔父が亡くなり、下市場に戻ってきます。

下市場に戻った父は、ここで初めて百姓をします。必死で働いても大家族の生活は苦しく、また離れていた時間が長いこともあって祖父母たちと旨いかず、屋敷内の小屋に別居します。

この別居で、父は貧乏からは解放されませんが、古い百姓からは解放されました。「米麦だけではダメだ、豊川のように野菜を作ろう」と、働き者の母と力を合わせ、当時は珍しかったトマト、ブロッコリー、セロリなど、失敗を繰り返しながら様々な野菜をつくります。「人に聴くだけではいかん、自分で勉強しないかん」。苦しい家計か

ら、専門書を買って植物の基本から農作業や経営まで、毎晩疲れた体で勉強し、新しいことに挑戦します。北城の田圃に全部自分で鉄鋼のビニールハウスを作ります。子供たちも喜んで手伝います。でもハウスは二年ぐらいで伊勢湾台風で潰れてしまいます。更に貧乏は続きますが、好奇心と向上心と思いやりを持ち続け、子供たちに話します。「体の弱い父ちゃんや百姓やれるのは、母ちゃんのおかげだ。母ちゃんはい」。後で母を介護する原点になります。「トマトを作るのは儲けるためだけではない、喜んで食べてくれる人の為だ」「どんな人でも良いところはある」「人は死んで土になる。人のためになる人生を送らないかん」などと。晩年、苦労したが良い人生だった」と言います。

私は父も母も尊敬していたので、巣立ちにはエネルギーを使いました。私は「なんで百姓は苦労して働いても貧乏なのか、作ったモノに自分で値段が付けられないんだ」「なんでアメリカとソ連は核兵器まで持つて唾み合うのか」考えたものです。青年団の仲間と楽しく過ごした青年時代、自分は何かしなければと、社会活動に政治活動に参加し始めました。父は布団の下に鉋を隠して「なにもお前が

しなくてもいい」と猛烈に反対して怒りました。私は「父ちゃんや人のためになる人生が大切と教えてくれたがね」と反発し様々な行動をしました。色々と苦労をかけたましたが、農業委員や市会議員の仕事を応援してくれたし、孫たちを本当に可愛がってくれました。母は、寝たきりになっても三人の孫の誕生日を覚えていて、必ず小遣いを渡していました。子供たちは「お母ちゃんよりお爺ちゃんお婆ちゃんにお守りしてもらった記憶の方が多い」と言います。子供たちは家に来ると自分たちの子供と一緒に必ず祖父母の仏壇に手を合わせます。

色々な人に助けられました。私は農業高校に行きたかったのですが、通学できる範囲には無く、大学へ行く金はない、就職に有利で理科が好きということで、東山工業高校へ入りました。男女共学なのに紅一点、新聞記事にもなりました。勉強は大変でしたが、物事を科学的に見る基礎の一つは作られたかと思えます。入学のとき我が事のように喜んでくれて、当時の私には大金の千円をくれたのは治夫さんのお母さんの「しいさま」でした。

勤めていた日本コントロールズ会社で、大量人員整理のとき、首

切り反対と居座り配置転換された倉庫で「ヒロミ君、元氣か？」といつも声をかけてくれたのは光夫さんでした。本のセールのをしていたときに、「定年になったら読もう」といつて全集を買ってくれた富士夫さん。最初に農業委員に立つときに、「農業委員でなくて市会議員をやれ」と心配してくれた同級生の裕さん。農業委員で一緒だったこともある聖さんの田圃で「おーおい、稲はどうじゃ？」の声だけが、何年も耳に残りました。夫の病氣や度々の転職でも、子育ては続きました。弱虫の長男、気の強い長女、腕白の次男の三人の子供は、沢山の友達に囲まれて、学校や町内や近所の大人たちに見守られ、生きる力を身に付けて大人になったと思います。親の離婚で、月に一度だけしか父親に会えなくなつた孫もお世話になつていきます。この紙面をお借りして、本当に皆様に感謝したいと思えます。二十一年前の内津川水害で、災害の怖さを目の当たりにし、議会でも何度も取り上げてきました。東日本大震災で原発事故に遭遇した日本は国の在り方を変えるときではないでしょうか。若者達に希望が持てるよう、先祖様に戴いた命を大切に、夫と共に少しでも有意義に生きて生きたいと思えます。

みんな似たようなモノ

住職 春日井浩道

生物の四十億年の歴史を一年の長さにしてみると、人類がサルから別れたのは十二月三十一日の、正午位のものだという。そのあと、現代の人類がアフリカで誕生したのは、除夜の鐘の鳴り出す時刻である。その、つい二三十分前に出てきた人類が、あつという間に生き物の王者にのし上がった。一方で絶滅危惧種の行く末を心配する余裕があるかと思えば、人間に気に入らない種類の生き物には、平気で絶滅に追い込もうとする。自分勝手なものだが、まあ生き物はそもそも利己的なものだからそれは致し方ないのであろう。

ところで、この人類とサルを分けたのは「知恵」である。直立することによって、手を開放された人類は、圧倒的な脳みそを獲得したのである。そして、言葉と文字の使用により、人類は、自分の脳以外の場所にそれこそ天文学的な量の知識を集積してしまった。それも、最近ではインターネット上に表示されるものも多く、世界中の知識があつという間に、まさにこの場所で見ることが出来てしまう。そういう意味では、世界は一つの脳みそになったと同じである。と、こういう状況にはなっ

たが、個々の人間はどこまで行っても、矢張り生き物なのである。生まれて、飯を食べ、子供を作り、そして死ぬ、という宿命は免れ得ないのである。それもせいぜい百年くらいのものだ。四十億年を一年に短縮してみれば、その長さは一秒にも満たない。しかし、個人にとつてはそれが全てで、この長さの内に、人は全てのことをやり

仰せねばならないのである。ほかの動物のように、子供を育てて死ぬだけなら、十分な長さかもしれないが、それだけに留まらないのが人間様の欲である。結局はほとんどの人が、中途半端で死んでしまふことになる。「ワシはよく頑張ってきた。満足じゃ」と言つて死ぬ人間が何人いるのか。まあ、そのへんは諦めの問題であるから、一概には言えないが、体力、気力との関係もありそうである。

秀吉という人は、日本中を手に入れたが、飽き足らず大陸までも手を伸ばしたが結局は途中で死んでしまった。ジンギスカンという人は、大陸のほぼ全てを手に入れたが、あつという間に元の黙阿弥になった。ナポレオン然り、田中角栄然り。盤石そうにみえた自民党も野党に下がり、いまや民主党も風前の灯火である。

そういう中でも、インフラとし

ての人類の知恵は着実に発達していく。今後、人間にとつてできないものは、命の合成くらいのも。もう、地球上には神様の居場所は無くなつてしまつたと言つても過言ではあるまい。しかし、あくまでこれは知恵の話。

現実世界は、欲だの色気だのといったものが支配するのである。とんでもないインチキな論理で人を死に赴かせたり、力で脅して他国のものを横取りしたり。でも、そんなのは所詮権力者の地位保全という大命題が根底にあるのでは。民主党が無茶苦茶なマニフェストで政権を獲得したのもこの部類だろう。

では、さてどうするかということになると、さっぱり分からないのである。七十億人も人間が、大体食べ物も満足に無く、しかも狭い土地にひしめき合つて、こんな状態がいつまで続けられるのか。現世人類が生まれて十八万年というが、そういう点では何も発展していないようでもある。五万年くらい前に描かれた洞窟絵は、現代人のセンスと変わらないし、五千年前のピラミッドは、現代人にもなかなか作り得ないものである。一体、進歩とはなんだろうか。膨大な知恵はなんの役に立つのだろうか。

お盆のお知らせ

棚経の日程

八月十二日 浅山、鳥居松

勝川、名古屋方面

八月十三日 四谷、南部

熊野、神領方面

八月十四日 下市場 穴橋 掘北

八月十五日 穴橋、関田、上条

高蔵寺、坂下方面

右は原則です。

別途個別にお知らせします。

お施餓鬼

お施餓鬼は、毎年八月十八日で今年は土曜日になります。七月一日から受付をしております。早い時間帯は、予約済みになっております。ご希望の方はなるべく早めにお申し込みください。電話で結構です。

お布施は今までどおりで

初盆施餓鬼 五万円

特別大施餓鬼 三万円

大施餓鬼 二万円

合同施餓鬼 一万円 です。

精霊流し

八月十五日の午後四時半から慈眼寺の山門で、檀方総代の方をお願いして集めてもらっております。まとめて供養のうえ処分しております。明るいうちにお持ちください。

夏の草花

以前に菩提樹をもらって植えたことを書きました。ふた冬は越しましたが、三度目の冬は越せませんでした。同じような経験がハイビスカスにもありました。露地に下ろして、夏の間は大成長でした。冬になっても咲いていましたが、ある朝、霜が降りたら途端に萎れてしまいました。名古屋の荒子川公園というところにいっぱいハイビスカスがあるというので、冬はどうしているのか聞いてみました。矢張り冬は枯れるのだそうです。枯れたらまた植えればいいのだそうです。ナルホド。

本堂の前にあった睡蓮も今年の冬は越せませんでした。そこで今年は新しいのを買ってきました。枯れたら買えばいいと思ったら気分は楽にはなりましたが、なんだか草花にはかわいそうな気がしないでもありません。

世紀の天体ショー

今年はいわゆる天体ショーが二つ続きました。五月二十一日の金環日食と、六月六日の金星の太陽面通過です。いずれも、予告されていたなければ見落としてしまう現象ですが、「世紀の」と言われれば年甲斐もなく興奮しました。両方とも、天気は危ぶまれていましたが、結局はよく晴れて見る事が出来ました。金環日食の瞬間には、景色が青みがかって一瞬不思議な世界が出現しました。



金環日食
5月21日



金星と太陽
6月6日

津波と大仏

生まれて始めて鎌倉の大仏様（阿弥陀様）を拝みました。



これは大仏の内側から頭の方を見上げたものです。なんどもツギハギに修理したあとが見られます。ところで、この大仏は以前には大仏殿があったそうです。が、一四九八年の津波で流されてしまったそうです。大仏の周りには今でも大仏殿の礎石のようなものが並んでいます。大仏辺の標高が十三メートルですから、津波は二十メートル位はあったのでしょう。ところで、この時の津波は東海地震の震源域で起こったもので、同じ津波で、当時「遠く淡海」と言われた浜名湖が決壊しています。最近、東海地震はいつ起こっても

不思議でないと言われておりますが、鎌倉辺りは観光客でいっぱいでした。まあ、津波は鎌倉には限らないと思いますが、この無防備さはどうなのでしょう。

編集後記

今年は春先の気温が上がらず蜜柑などの実の付きも悪いようです。大震災から一年半になりますが、政治家は被災地そっちのけで、政争に明け暮れています。原発なんかは政治的に安全宣言を出して再稼働を図っています。選挙公約にも無かった消費税を、震災のせいにして上げるのなら、原発の安全についても、もっと厳しく審査してもよさそうですが、そのへんは臨機応変なんでしょうか。

梅雨が明けると猛暑になるという予報もあるようです。どうか、熱中症にはならないように気を付けてお過ごしください。

原稿を募集していますので、伊藤秀文または慈眼寺までお寄せいただければ幸いです。

「慈眼寺たより」第十二号

平成二十四年七月十五日発行

ホームページ

<http://www.ma.ccnw.ne.jp/jigenjl/>

暑中お見舞い
申し上げます

檀方総代

伊藤辰男	伊藤久幸	伊藤秀文	伊藤正広	大野和義	大野悟	木村広孝	春日井浩道
全	全	全	全	全	全	全	住職